

富樫豊(応援家)、栗原知子(福井大学、世話人会代表)

1. はじめに

シンポジオンは、久保猛先生(当時石川支所長)、永野紳一郎先生(現支部長)のご尽力により 2003 年度支部大会(金沢)から支部活動活性化の担い手として華々しく登場いたしました。その後、各支所持ち回りの開催で、シンポジオンは今なお継続しております。

しかしながら、すべてが磐石というわけではありません。これまで活動を担ってこられた各支所の方々の高齢化により、活動が若手に引き継がれにくくなっていることや、本部企画男女参画事業とのバッティングなどで運営が多少ギクシャクし始めております。とはいえ、学生を主体としたフランクな知的交流場の価値は少しも揺らぐことはなく、今後に向けての潜在的な期待は却って高まっています。

つきましては、支部の皆様各位から熱い応援をこれまで以上に賜りたく、ここ支部役員会の場に参上し、シンポジオンの心意気をご説明いたします。よろしく願いいたします。

2. 目的

・目的：学生各自の主体的実践等活動を話題として持ち寄り、学生主体で学生同士、職業人、市民との知的交流を楽しむことにある。

・様相：学生は話題提供と語り合い。全員で交流。支部は学生に交流のチャンスと場の提供。

3. 経緯

- 2001年 事業委・研究委で支部活動活性化の本格議論
学生への支援、実務者への支援(技術報告に道)
- 2002年 北陸支部大会長野にて「実務者討議の集い」を実施
- 2003年 北陸支部大会金沢にて「シンポジオン」を実施、
支部行事として毎年恒例開催(支所持ち回り運営)、
- 2015年 世話人会が運営に参加、運営に工夫(対男女参画)
現在に至る

4. 運営

- ・支部を挙げての行事、大会開催支所が企画運営。
- ・学生が時には主体的運営(学生が世話人会代表)
- ・学生は主体者として知的交流。
- ・交流においては、参加者同士が対等・平等で自由闊達に語り合い。

5. 進め方

- ・参加；学生がグループ参加(単独可)、市民・職業人参加
- ・発表；チーム毎に複数にて発表(単独可)
- ・語り合い(1)；チーム毎に島を作り、留守番組と遊撃組に分ける。前者は他チームの遊撃に備え、後者は他チームの留守番にそれぞれ語り合い(議論吹掛あい)。途中攻守交代(各チーム留守番と遊撃の交代)。

・もしくは語り合い(2)；島ごとに論題を決め、参加者は好きなテーマの島に集まり、集まった者同士で語り合い。途中(席替えの)シャッフルあり。

・まとめ；各島での語り合いの様子を学生が報告。職業人・市民からもコメント。

6. テーマ 話題提供テーマの種類と内容例

- ・コミュニティ・街づくり：山村、都市中心他、伝統街、ポケットパーク、雁木、他
- ・構造、震災；能登半島地震、耐震補強と外構、他
- ・子ども；施設、子ども遊び
- ・農、森林；雑木林
- ・作品、設計；住宅、傾斜地利用、他
- ・実物模型；住宅、商業施設、椅子、机
- ・他；学部的设计製図課題(学部生参加)

7. 様相

a プレゼン

私たちこんなことしていますと熱弁。



b. テーマ毎の島に着座で語り合い

街や福祉などのテーマでとことん語り合い。



明かり工芸品づくりの実演。語り合いながら。

c. 遊撃スタイルの語り合い



市民も交じりて語り合い
時には職業人とラリー。
実物机作品を前に語り合い。



d,各グループのまとめの発表

各自グループにて、語り合いの様子をまとめる。



7. 効用 気づきから築きへ

学生が自ら自由に楽しむことができれば十分とする。あえて効用を理屈づけるなら以下の通りである。

- ・主体であることの面白さが楽しく実感。
 - ・知的世界における自由・平等と相互尊重が実感。
 - ・各種活動の背後にある人間的土壌や社会性が実感。
- 多様な観点からの世界が垣間見れる。(志の醸成へ)
- ・職業人・市民も成長する学生と語り合いを楽しむ。

8. 問題点と今後に向けて、(まとめにかえて)

(1)問題点；シンポジオンが支部目玉行事として 16 年も継続していることは奇跡に近いのかもしれない。その一方では、最近はおかつの賑わいが多少かげつている。主な問題は次の通りである。

・これまで支えていた各支所の中心者・協力者の高齢化。後を継ぐ若手への世代交代が困難。

・学生層にシンポジオンの様子が伝わらず。

(例年、各支所中心者・協力者が学生へ働きかけていた、その意味でのコミュニケーションも熟していた)

・本部主催の男女参画事業とバッティング。

男女参画が 2016 年より支部大会で実施されるようになってからは、男女参画の後にシンポジオン開催という直列配置で対応していた。最近では支部大会終了時刻を早めるために、苦渋の選択で男女参画のみの実施が続いている。

(2)今後に向けて；シンポジオンを実施し続けることで賑わいを維持していけると考えている。継続に向けて以下のことを考えている。

- ・支部での扱いの再確認、一層の支援の共通理解。
- ・実施の現実対応策

開催支所での人手不足 →世話人会がアシストで

男女参画との関係；男女参画の後に、もしくは昼休みに男女参画が別日なら従来どおりで

- ・支所の一層の協力 →今後への継続、支援者増
- ・願わくばシンポジオンの川は日常的に定着させたい。

【補足】シンポジオンの特徴

・研究発表・デザイン発表、学内の発表会・講評会との違いは、対等で自由な場のもとでの交流にあり。

・討論ではなく語り合いにより、開かれた知的交流を実現。しかも、交流には、学会の場にて学生・職業人・市民の結集による多様性で磨きがかかっている。

【補足】参加者 ・参加者総数；25～90、平均 44

- ・学生；開催大学学生多し。学部 2 年～大学院生。計画系多し。構造系や土木・交通・文系も参加。
- ・職業人・市民；全数の 20%～30%。市民はわずか。

A. 付録 (以下敬称略、*印は学生)

A1. 実施記録

16 年間 704 人、会場、主務、参加学生チーム数、参加者総数

2018	金沢工大	須田、栗原	5、35	
2017	信州大	遠藤、野田*	3、32	
2016	福井大	磯、野田*	5、30	
2015	長岡造形大	後藤	講師 2、23	シンポジウム
2014	富山大	大氏	講師 2、40	建築家鼎談
2013	金沢工大	内田	26 作品、40	ポスターコンクール
2012	信州大	松田	5、35	
2011	福井工大	多米	4、35	
2010	新潟工科大	深澤	8、60	
2009	富山大	横山、乙川*、松澤*	9、80	
2008	金沢工大	土田	5、65	
2007	信州大	柳瀬	5、50	
2006	福井大	葉袋、桜井	11、90	
2004	富山県民会館	葉袋、富樫	4、50	
2003	金沢工大	永野	3、30	若手主体
2002	信州大	田守	9	実務者対象

■ ■ 参加の大学 年度ごと参加チーム

年度	17	16	15	14	13	12	11	10	09	08	07	06	04	03	02
新潟大			3					2							
新潟工科大							1								
長岡造形大			1												
富山大				1					2	1		1	0		富山 *
金沢大											1	1			
金沢工業大		1			*		4	3	1	1	1	1			石川 *
石川高専		1				1	1				2				*
福井大	1	3						1	1		1	4	1		福井 *
福井工大						1	2		2	3					
信州大	2					3	1					2	2	1	*
ほか				1					1						
合計	3	5	2	26	5	4	8	9	5	5	11	4	3	*	
チーム数	32	30	23	40	40	35	35	60	80	65	50	90	50	30	9
参加者	32	30	23	40	40	35	35	60	80	65	50	90	50	30	9

A2. シンポジオンをこれまで支えてこられた方々

(40 人程、所属は開催当時)

福井地域 9人

福井大；桜井康宏、葉袋奈美子、栗原知子*、竹原郁美*
磯雅人、野田真士*

福井工大；多米淑人、下川勇、吉田純一

石川地域 9人

金沢工大；久保猛、永野紳一郎、下川雄一、川崎寧史、
土田義郎、内田奈芳美、須田達

石川高専；熊澤栄二

金沢大；北浦勝

富山地域 7人+a

富山大；丸谷芳正、横山天心、乙川佳奈子*、松澤光聡*、
大氏正嗣、貴志雅樹

支所；富樫豊、他多数

新潟地域 6人

新潟大；西村伸也、桜井典子*

新潟工科大；深澤大輔、

長岡造形大；平山郁男、後藤哲夫、広川智子

長野地域 8人

信州大；田守伸一郎、土本俊和、柳瀬亮太、松田昌洋、
遠藤洋平、岩井一博、高村秀紀、坂牛卓

A3. 参加者の声(一部のみ)

(1)学生側；ためにもなったが、とにかく面白かった。他大学学生の考えが聞き良かった。進むべき道の面白さや深さに気づいた。学部 2 年でも一人前としての扱いが嬉しかった。

(2)職業人側；こうした機会の体験は若者に必要。学生を覇気無しというが、学生の活力に大人は気づいていないだけ。